女性性の諸側面について

山　口　素　子

Various Aspects of the Feminine

YAMAGUCHI Motoko

I. 女性性について

女性性あるいは男性性について考える場合，まず次の2通りの考え方を区別しておかねばならない。まず第一の考え方は，所謂〝性差〟から男性性・女性性を論じるものである。これは現実の社会の多くの男女の性格，行動特性から，統計的に最も多く差異がみられるものをとり出し，これを男性性・女性性とみなす考え方である。つまり，男性性とは現実の男性と女性とを比べた際に，男性により多く見られる性的性格であり，女性性もまた同様ということができる。このように〝性差〟から男性性・女性性が定義される場合，男性性と女性性は一次元上の両極に位置することになる。つまり人は，男性性が強い場合は女性性は弱く，また逆の場合も同様とされる。従来の性度テストは，多くがこの〝性差〟から定義されている (e. g. Terman & Miles による Attitude-Interest Analysis Test, Strong による Masculinity-Femininity Scale of the Vocational Interest Blank, MMPI の Mf 尺度)。

しかし一方，第2の考え方として，Jung のように，女性(男性)性をただ女性(男性)のみに存在するものとして限定せず，むしろ存在における一原理として把握しようとする考え方が存在する。Watts, A (1966) は，典型的に男性的，典型的に女性的なものがあると考え，〝典型的に男性的，または女性的なものは，生物学的に男性，女性といわれているものと，かならずしも関係はない〟と述べている。これは，人間の歴史の発展を通して，長い間に固定され，観念化された〝男なるもの〟，〝女なるもの〟のイメージである(多田，1973)ともいえるであろう。

Freud (1969) は，〝個々人というものは，全てその両性的な素質と交叉性の遺伝の結果として，男性的と女性的との両性性格をそれのうちにともに併せもっており，純粋に男性であるとか，女性であるとかは，理論的な構成物にすぎない〟と述べている。しかし彼は男性が男性として成長していくには，その女性化をいかに克服していくかが問題であり，女性は男性性器の名ごりである陰核へのリビドー備給をすみやかに除外していく事が重要と考えた。それに対し Jung は無意識の中に存在している異性を，その個人にとって必ずしも破壊的なものでなく（もちろんそういう場合もあるが)，発展の可能性を秘めたものとしてとらえた。前述の Watts もまた，〝男の中にある女性〟をあげ，〝我々にとっては，そのかくれた女性的な面を尊重して，もっと活用することが，まことに大切であると思われる〟と述べている。このように心理的両性具有性を否定的なものとみなすか，肯定的な面を認めるかには個人によって違いがあるとしても，彼らが共に，人間を男性性，女性性をともに併せもっている存在としてとらえている点については共

通している。このように，人間を心理的に両性具有的な存在としてとらえ，必ずしも生物的男性，女性に対応しない，存在における一原理としての男性性・女性性を考えるなら，男性性が優位で女性性が劣性な人や，その逆のタイプ以外に，両性性ともに豊かな人や，共に乏しい人など，様々なタイプの人の把握が可能となるであろう。本論文でとりあげる女性性とは，この第2の考え方によるものである。

ところで，このように存在における一原理として女性性を考えていくとして，さてそれは一体どのようなものなのであろうか。そのイメージは，実際には様々な文化，社会的要因の影響を受けるので，それを明確に把握する事はむずかしい。また一口に女性性といっても，それには恐らく様々な側面があり，Guggenbühl (1979) が指摘するように，その時代，あるいは文化によって優勢な側面，あるいはほとんど注目されない側面といったものがあると思われる。このように女性性といっても，非常にとらえがたいものであると考えられるが，ここではひとまず，Neumann, Ulanov, Guggenbühl の3人による記述をとりあげ，このような女性性の諸側面について考えてゆく足掛かりとしたい。

II. Neumann による女性性の諸側面について

Neumann (1955)は著書“Great Mother”において，女性性の構造として，〝基本的性格〟と〝変容的性格〟を区別して考えた。このうち，〝基本的性格〟とは，大いなる女性のうち，大いなる環，大いなる容器として，自らの中から生じたすべてをしっかりととらえ，永遠の物質のようにそれらを包みこんでしまう局面である。そこから生じたものはそこに属し，その支配のもとにとどまる。彼によると，この基本的性格は，自我と意識がまだ幼く未熟なとき，無意識が優勢であるとき明らかになる。それゆえ基本的性格は，ほとんどいつも〝母〟の決定因をもつ。自我・意識・個人などは，男であると女であるとにかかわらず，基本的性格との関係では子供っぽく依存的である。基本的性格のきわだった特徴は，〝包む〟という機能であり，それは，プラスの面では，保護し，養い，暖めることとして，マイナスの面では束縛したり，固着することとして示される。このように基本的性格も，変容的性格と同じように，もともとはあいまいで相対的であり，善と悪の両面をもつが，それでも女性性の中では保守的で安定した，恒常的な部分に基礎をおいている。これは母性において支配的な特性である。彼はまた，基本的性格が優勢な女たちは，集団としてしか男と関係をもたないと述べている。女たちは個人としての男と関係をもたず，彼の中に元型的状況だけを体験する。たとえば，父権社会の女たちは，男を子供をはらます元型的な父と見なす。男は安全を—経済的にも安全であればもっと望ましい—彼女とその子供に与え，共同体の中で社会的ペルソナの地位を女に貸し与える。

一方，女性性の〝変容的性格〟では，基本的性格の保守的な傾向とは対照的に，心の力動的要素が強調されている。それは，運動へ，変化へ，一言でいえば変容へと駆り立てるものである。基本的性格は，自我や意識をいつも無意識の中に引き込もうとする傾向があるが，変容的性格は魅惑することはあっても溶解することはなく，人格を動かし，変化させ，ついには変容を起こす。この変容的性格を最も著明に担っているのがアニマである。アニマは，原動力であり，変化の駆動であり，その魅惑は，男を誘惑し勇気づけて，内面的ないし外面的世界での魂と精神の行動と創造のあらゆる冒険におもむかせる。基本的性格としての無意識は，たとえば，集合的無意識の

自発的な過程が精神病の中に示される例のように，まったく〝独立的〟で〝自足的〟である。このことは，無意識の諸過程は，それが操る人間の人格とは無関係であることを示している。無意識の諸過程は，人の中で自律的で自然な過程としておこる。これに対し，変容的性格の構造は，人格と関係をもち，意識の自発性を観迎する。ただし Neumann によると，この二つの性格は，初めから全く反対だというわけではなく，相互さまざまに混じり合い，結びついている。その一方の性格だけが見えるのは，むしろ異常で極端な布置にあるときだけである。しかしまた，普通は両者が同時に存在するとはいえ，ほとんど常に，そのうち一方が優勢であるとも述べられている。

Neumann はさらに，大いなる女性の機能領域を述べる中で，大いなる女性の構造を示す模式図を示している(図1)。この図は，二つの軸と四つの円から成り立っている。二つの軸は女性性の二つの性格に対応する。すなわち，M軸は基本的性格に対応し，母性が強調される。他方A軸は変容的性格で，アニマが強調される。二つの軸には，上部のプラス極と下部のマイナス極とがある。M軸は基本的性格の領域を示し，その下部のマイナス極にはテリブル・マザー (M^-) があり，上部のプラス極にはグッド・マザー (M^+) がある。同じように，A軸は否定的な下部(A^-)から肯定的な上部 (A^+) までの変容的領域を示している。そしてこの女性性の性格を示す軸の模式図に，その展開を示す円の模式図が結びつけられている。

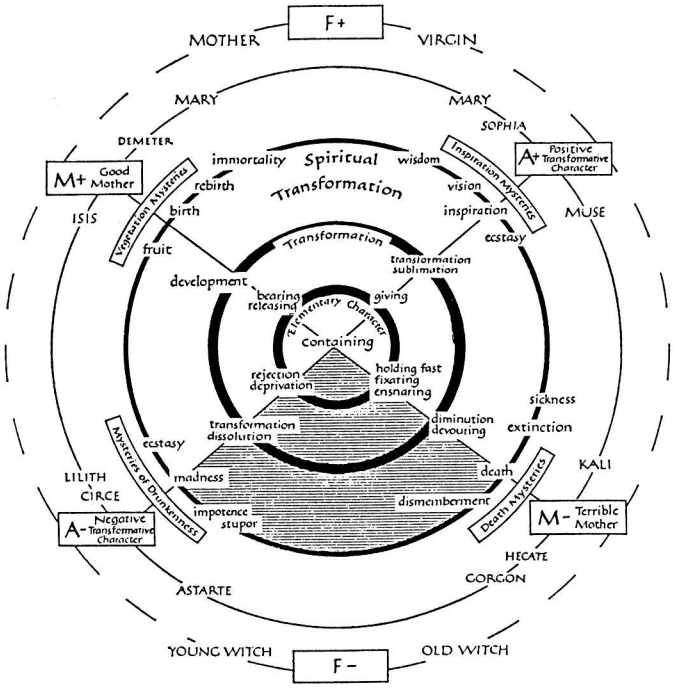

図1　Neumann による模式図

このうち，最初にM軸にそって4つの円とのかかわりをみてゆきたい。まず中心の円は，大いなる女性の基本的性格を示している。この領域では，母性的な基本的性格が変容的性格よりも著しい。基本円の中心は，包みこむ機能を表わし，基本的なM性格を示す軸にそって，プラスのM

極の方向に，成長と発達の基礎である出産と解放の機能が示されている。その反対に，束縛，固着，捕獲機能が否定的極に向かい，グレート・マザーの危険で恐ろしい一面を示している。次に第2の円との交点では，M^+ 点との交点に発達，M^- 点との交点に減らす，貧る機能が示されているが，第2の円では，変容的性格 (A) が優勢であり，基本的性格 (M) は劣勢である。3番目の円，精神変容との交点では，M^+ 点には〝植物の秘儀〟，M^- 点には〝死の秘儀〟が当てられている。〝植物の秘儀〟はグレート・マザーの豊饒儀礼と密接にかかわっていて，成長と生命の増加に関係している。一方〝死の秘儀〟は，テリブル・マザーの呑みこみ—捕獲機能にもとづいた秘儀であり，個人の生命は，テリブル・マザー自身の中に引き戻されてしまう。ここでは子宮は呑みこむ口と化し，減少，強奪，切り裂き，壊滅，腐敗，衰退という概念象徴がここに現われる。最後に第4番目の円には，一連の女神たちが書き入れられ，各極の性質や作用が示されているが，M^+ 極には，エレウシス派の秘儀の女主人公であるデーメーテールの母性的な姿が見出される。しかし，ギリシャや非ギリシャのアルテミス，エジプトのイーシス，バビロンのイシタール，仏教の観音菩薩など，その他あらゆる民族あらゆる時代の女神たちも，この極におかれる姿形である。シェキナのユダヤ的な姿は，この極のもつ女神の母性要素に対応し，他方キリスト教のマリアは A^+ 極の，すなわち処女の要素を強くもっている。一方 M^- 極には，テリブル・マザーの性質をもつすべての女神が並んでいる。インドのカリ，前ギリシャ時代のゴルゴン，ギリシャのヘカーテ，恐ろしいイシタール，イーシス，アルテミスなどのほか，数多くの宴府の女神と死の女神が並んでいる。この領域にはまた，エリーニュエスとフーリエ(いずれも復讐の女神)，妖婦，エンプーサ，魔女たちなど，否定的で悪魔的な女たちも属している。

次に今度は，A軸にそってみてゆきたい。まず第一の円は，先述したように，基本的性格が顕著であり，変容的性格は劣勢であるが，授与機能における，庇護，保温，養育のうち，保温と養育の機能では，変容的性格にもかかわっている。次に変容的性格が優勢である第2の円との交点では，A^+ 点では変容と昇華の機能が，A^- 点では変容と分離機能が示されている。3番目の円との交点では，A^+ 点には〝霊感の秘儀〟が，A^- 点には〝酩酊の秘儀〟が当てられている。霊感は，占術・予言などといったあらゆる精神的—心的領域に属している。女性性のもつ陶酔的で狂宴的な性質は，変容的性格の肯定的極に属し，女性とデイオニュソスとの関係を非常にはっきり示しているが，しかし，狂気という否定的な A^- 極に変化しそうな危険もまた，この関係には明らかに見られる。A^- 極の〝酩酊の秘儀〟は，変容・消滅・拒否・剝奪の機能にもとづいている。テリブル・マザーの死の秘儀で重要な役割を果たすのは，M軸の否定極にいる〝老魔女〟だが，その肉体的な死の性格よりも，この現象は精神的—心的な死の性格により深くかかわっている。これら昏迷・恍惚・無力感・消滅に導くものはすべて，〝若い魔女〟による誘惑の領域に属している。最後の円との交点では，まず A^+ 極は，神なる処女のミューズの場所とされている。処女アテナイとアルテミスもここに関係しているが，2人とも別の要素をもっている。アテナイは，前ギリシャークレタの母なる女神なので M^+ 極に属するし，アルテミスの中には〝大いなる女神〟として，他の極の属性もふくまれている。デーメーテルの娘であり分身であるコレーも，エジプトの正義の女神マートも，後世のソフィアや叡智の姿も，みな同じようにこの極におかれる。一方 A^- 極には，宿命的な悩殺力をもつ魅力的で誘惑的な姿が見られる。その一部はアシュタルテ，アフロディテ，アルテミスのような女神であるが，ほかにも，リリス，ローレライのよ

うな妖精，キルケやメディアのような，人間化された女神の姿などがある。彼女らすべては，誘惑して破滅に導く性格が強調されている。大勢で現われている魔女や精霊や妖精など，まだ形の未分化な一群の女たちも，このグループに属している。

III. Ulanov による女性性の諸側面について

Ulanov (1971) は "The Feminine-in Jungian Psychology and in Christian Theology" において Toni Wolf を引用し，女性性の4つの構造の型を示している(図2)。この図によると，マザーは集合的な方法で人に関わる。一方ヘタイラは個人的な方法で人に関わる。またアマゾンは集合的な方法で非個人的目標に関係し，メディアル・ウーマンは個人的な方法で非個人的目標に関係する。Ulanov はこれに，Mario Moreno の記述を合わせて，さらにこの4つの型に説明を加えた。上述した Neumann が主に男性とのかかわりの観点から女性性の諸側面を述べたのに対し，ここでは(1)そこに優勢な元型，(2)女性のアイデンティティ (3)現実の男性との関係 (4)アニムスとの関係 という4つの観点に分類して記述されているのが特徴である。以下この4つの型についての説明を順をおってみてゆきたい。

まず〝マザー〟であるが，これは字義どおり母性が主となっており，無意識的にグレート・マザー元型に占められているパーソナリティを生む。その肯定的な側面としては，人や理念などをささえ，成長に必要な空間を作る。また未完成で心的発達のための場所を必要とするものに安全な場を提供することなどがあげられる。また否定的な側面としては，成長してしまったもの，あるいはそれを必要としないものに対する，過保護と所有性があげられる。それは他者の強さへの信頼の欠如に通じ，他者の発達を妨げるかもしれない。この他者に対する破壊的な保有は，象徴的には〝むさぼり食う母〟として示される。女性のアイデンティティにおいては，肯定的側面は，現実の母親，あるいは母性的行動の中に見出される。マザータイプは人に集合的方法でかかわる。つまり男性に対しては独自の個性というより〝夫〟として，子供に対しても同様に，独自の個性というより〝子供〟としてかかわる。このタイプの女性は主体性を放棄する傾向があり，無意識的であるにせよ，他人のために生きる。しかし，それが否定的に現われると，自分自身を犠牲にし，他者を過剰に受け入れることとなり，母的なことをする以外は何もないパーソナリティを生む。その場合，自分の生きられていない，受け入れられていない側面を被保護者にしみ込ませ，彼らを通してそれらの側面を実現させようとするかもしれない。男性との関係においては，マザータイプは男性を子供の父として，あるいは彼女の預り者への父的影響力としてみる。彼女は夫のペルソナを促進，保護するが，彼の他の資質や興味は無視・抑圧する。マザータイプのアニムスは，この夫に対する意識的観点を補償する傾向にあり，〝永遠の少年〟で示される。肯定的には，それは革命家，芸術家，哲学者などの創造的姿で表わされ，否定的には，誰も理解しないすねた少年，自分の才能を発展させることのできない，潜在的に創造的な男，大きな計画や約束をするが実現できない男として表わされる。この否定的なアニムスは子供に深刻なはね返りをもたらすことがある。なぜなら生きられなかった創造的なアニムスの能力が現実の息子へ投影され，無意識のうちに，息子がそれを実現するように圧力をかけることになるからである。

ヘタイラ；女友は[1]，マザーの対極に位置する。ここではグレート・ファザーの元型が優勢であり，父のアニマに同一化する〝父の娘〟〝永遠の娘〟のパーソナリティを生む。ヘタイラは男性

の集合的心理よりも個人へ，グループとしての子供よりもむしろ個人としての子供へ方向づけらる。女性のアイデンティティとして，肯定的に表現される場合，ヘタイラは自分自身や他者の個人的主観的な心的生活を呼び起こし，集合的基準とは全く違った個人的価値感を運ぶ。また否定的に表わされる場合は，ヘタイラは不安定な個人の感情への関心のため，自分自身の態度や現実の関係に，いかなる永遠の掛かり合いも作ることができず，そのかわり人生をすべて，情緒的放浪とあやふやな愛着に導く。彼女は〝永遠の娘〟として父を偶像化し，他者に自分をささげることによる自身の発達を犠牲にする。男性への関係においては，男性の影及びアニマの主観的側面に影響を及ぼす。肯定的には男性の個人的興味や傾向，問題を刺激し助長するが，一方男性を集合的責任，現実的適応から誘惑する危険性をもつ。この側面はニンフ，誘惑する者，売春婦，魔女などの姿で表わされる。ヘタイラのアニムスは〝英雄〟で表わされ，外的な方向としての永遠の娘と内的に優勢なグレートファーザーを補償している。肯定的にはこのアニムスは，父への永遠の献身から娘を救い出し，男女のより対等な関係を示す。また彼女が処女の状態を抜け出て，自身の精神的特質を統合するように励ます。が否定的な場合，英雄は攻撃的になり，彼女を荒らし，破壊的な方法で彼女の内外の結びつきを切断する。

アマゾンは自己充足した，独立したパーソナリティ，〝母の娘〟であり，ここで優勢な元型は〝処女〟である。アマゾンは母に同一化し，母のアニムスに影響される娘であり，この限りにおいて，客観的文化的価値との関係を通して，男性からの独立を獲得する。しかしまたこの限りにおいて，彼女自身の女性的特質の多くは抑圧され，親の影の中で生きる。これが肯定的に表出された場合，アマゾンは，女性のアイデンティティにおいて，女性原理に誠実に根ざした独立性を布置する。彼女の心理学的発達は男性との関係には全く基づいておらず，男性から全く独立している。彼女は自分自身を独立的に女性的方法で文化的価値にささげる。アルテミスやパラース・アテナのイメージがこれを象徴する。現実の女性でいえば，マリー・キューリーなどがこれにあたるであろう。一方女性のアイデンティティにおいて，それが否定的に表出される場合，そこでは女性は原初的な母―娘関係にとどまっており，彼女の深い女性の自己に貫ぬかれることなく，またそれに気づいてもいない。彼女はペルソナを〝男性的女性〟として強化し，一方アニムスとその精神的要素との関係を避ける。彼女のセクシュアリティは抑圧され，自我への奉仕を強いられる。感情は未発達にとどまり，彼女自身ふれられないものとしてとどまる。彼女は権利はあるが，孤立し，一人ぼっちの人間となる。男性との関係においては，アマゾンは男性の自我にかかわる。肯定的には，仲間，同僚，競争者として，同じ意識的目標に向かう。否定的には，ライバルの姉妹として，羨望によってかきたてられ，兄弟と同等であることを望む，フロイトのペニス羨望理論は，恐らくこの否定的アマゾンタイプに基づいたのではないかと思われる。アマゾンタイプのアニムスは〝父〟で表わされる。肯定的にはアマゾンを純粋で原初的な精神的発達へと導く，精神的指導者，カウンセラー，司祭である。否定的には，娘を母からひき離し，女性の根源とのつながりを断ち，冷たい力の世界に彼女をひき入れさまよわせる，専制君主的な年老いた王で示される。

最後に〝メディウム〟であるが，メディウムとは[2]，中間という意味をもつ。それは，あるもの，あるいは他のものであるのではなく，何か中間にあるもの，代理人，媒介者の意をもつ．メディウムは，意識がそこに基づき，そこから客観的文化的価値が育つ，非個人的客観的プシケー

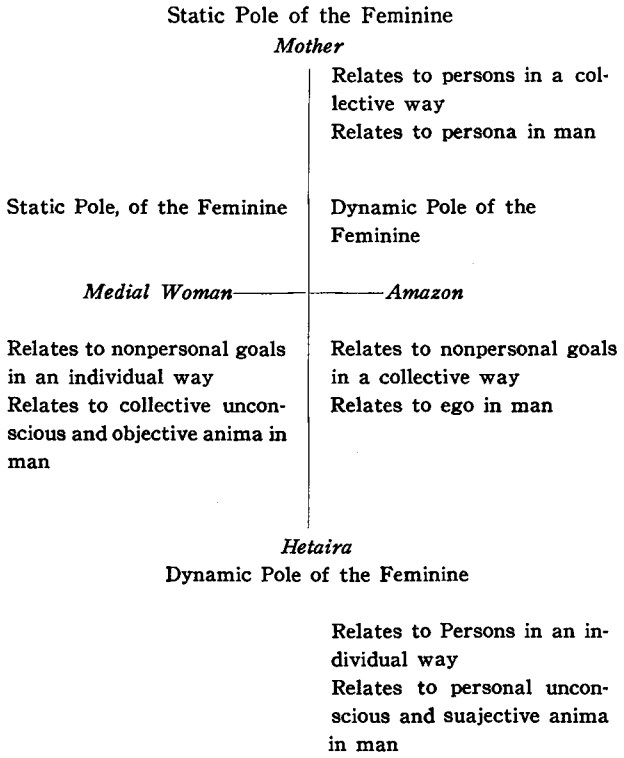

図2　Toni Wolf による図式

と関係し，個人的主観的方法で，女性性の深いふちの媒介となる。ここで優勢な元型は〝ワイズ・ウーマン〟である。この元型は肯定的には，雰囲気の中にあるもの，表現を見つけ始めているものを布置し，ソフィアや女予言者で象徴される。否定的な側面は，弱いあるいは全くない個人的自我に対する客観的心的内容の圧倒的影響に示され，魔女に象徴される。女性のアイデンティティにおいて，肯定的に表わされる場合，メディウムは他者に彼ら自身の，あるいは他の人の心的内容を気づかせるように鼓舞する。しかしこの肯定的アイデンティティを確立するためには，しっかりした自我と，次のものを区別できる，つまり，自我に属するものと環境に属するものとを，個人的ものと非個人的なものとを，そして意識の価値と限界と無意識の価値と限界とを区別できる，よく発達した能力が必要である。女性のアイデンティティに否定的に現われる場合，女性は混乱と破環の仲介者となる。男性への関係においては，メディウムは男性の普遍的無意識と関係し，その元型的内容，特に男性のアニマの非個人的側面を活性化する。表面下にあるものに形を与え，それが肯定的に働く場合は，男性の意識的適応，文化的発達を豊かにし大きくする。が否定的に働く場合は，男性を魅惑し，破壊するものとなる。メディアル・ウーマンのアニムスは，大部分が客観的心的内容に投影される。肯定的には，何か新しい人生の形が現われていることを示す文化的出き事の意味に焦点をあてる，賢者，教師，指導者で示される。否定的には，女性を肥大した力の段階へ誘惑したり，他人に属する可能性を自分のものとしたり，文化的出き事の中で表わされている意味を個人的意味とするようにそそのかす，悪魔，魔法使いによって示される。

IV. Guggeübuhl による女性性の諸側面について

Guggenbühl (1979) は〝結婚の深層〟の中で，〝ただ一つの男性的元型と，ただ一つの女性的元型があるのではないということは明白なはずであって，何百もとは言わないまでも，何ダースもの女性的及び男性的元型があるのである〟と述べ，その多くの女性的元型のうちのいくつかについて言及している。

まず第一は〝母性的元型〟である。これは，ギリシャ神話の中に出てくる地下の神々の形式では，一面では養育し，保育し，他面では呑み込むものであり，その精神的な形式では，一面では鼓舞し，他面では狂気と死へ駆り立てるものである。

彼は更にもっと幾分陰惨な元型として，無数の絵や彫刻に描かれているような，〝嘆きの聖母 (the mater dolorosa)〟に象徴されるもの，つまり子供を失った女をあげている。彼によると，その息子は戦争で死んだか，若くして事故で死んだか，あるいは墜落機のパイロットの母かであるが，そのような母はしばしば嘆きの聖母(マリア)の元型と自分とを非常に強く同一視するので，自分でも息子を失ってから別の女になってしまったように思えるのである。

また，天の父ゼウスの妻〝ヘラの元型〟であるが，これは，夫の注意を彼女自身から逸すあらゆるものに対して，獰猛で恐ろしい嫉妬深い妻になるという元型として有名であるとしている。

次にあげられているのは〝ヘタイラーの元型〟であり，この元型は，飽くことなき性的快楽と機智と学ぶことへの欲求をもった男たちの伴侶である。彼女は知的で，独立的で，しかも男性に対して敵対的ではない。

〝アフロディテの元型〟は，性的快楽の女神，望ましい愛人の元型である。この元型は，例えば，子供っぽく粗野なブリジット・バルドーや，また別の意味でマリリン・モンローにも見られるものであると述べられている。

また〝女神アテネの元型〟は，賢こくエネルギッシュで，自立的で，性的でなく，それにもかわらず男のたよりになる女の元型である。この場合，アテネは〝アニムス〟とは解することのできない女性的な知性の型を示している。

更に，ある種の未亡人や離婚女性には，何かしら元型的なものがあるようだとも述べられている。彼女らは自立していて，男は不在で，人に「やれやれ」といった印象を与える。そして，亡夫との関係は，被征服者に対する征服者の関係である。

彼は，ここまでの7つの元型をあげたところで，これらの元型のすべてが，多かれ少なかれ夫や恋人といった男に対して関係しているか，または，子供に対してや家族に対して関係をもっていることを指摘している。そしてもし，これらのみが女性的元型であるとするならば，女性の本性はエロスによって，結びつきによって特徴づけられると結論して間違いないだろうと述べている。しかし，彼は更に，少なくとも夫あるいは恋人としての男性，あるいは子供と何の関係も持たない女性の元型が，集合的意識にはそれほどよく知られてはいないが，前記のものと同様に重要なものであると言えると続けている。

その一例として，まずあげられるのが，〝アマゾンの元型〟である。彼女は子供を産むためにだけ男を必要とする。ある報告によれば，アマゾンたちは，妊娠するために男を捕えて彼等と寝た。男たちは一度その機能を果たすや殺された。異説によれば，アマゾンたちは，子供を産むためだけでなく，料理とか育児とか家事の雑用にも男たちを使った。アマゾンたちは征服を愛し，

他の女たちと一緒にいるのを喜ぶ。これは男を拒否する自立した職業婦人の元型である。また孤独なアマゾンの元型も存在する。それは一人で旅をしてまわるのが好きで，あちこちの人々を訪れるが，何物にも愛着を寄せることを望まず，不信の目をもって男性を見，女性と共にあることに居心地の良さを感じるが，さりとて同性愛ではない，若かったり，年とったりしている女である。

更に，もう一つの女性の元型として〝アルテミスの元型〟があげられている。彼女の男性に対する傾向もまた敵対的である。彼女は彼等に見られたり知られたりすることを欲しない。偶然彼女に遭遇した男は死ななければならない。もしアルテミスが誰かとつながりをもつとしたら，それは兄弟のアポロとである。これと同じように，多くの女たちは，彼女らの兄弟とだけ情緒的に結びついている。その外では，彼女たちは男や子供たちと何の関係ももたないようにしたがる。Guggenbuhl は，このことが，一概に神経症的な発達としてのみ理解されるのではなく，ある種の女性的元型の可能性を生きているとも解することができると述べている。

更に，男や子供に関係していないもう一つの元型として，尼僧や女司祭といったような〝貞節な女性 (the vestal virgin) の元型〟があげられている。これらの女たちは自らの生涯を神に捧げるか，何か他のもののために犠牲にするが，男や子供には捧げはしない。

このように彼は，性と家族生活のエロスに奉仕する女性の元型があるのとちょうど同じくらい多くの，夫や愛や子供に関係のない女性的元型があると言えると述べている。

V. 結び

以上，ユング派の3人による，女性性の諸側面についての記述をあげてきた。これらの記述は，その切り口や焦点のあて方がそれぞれ微妙に異なるので，そのどれとどれが対応するかといった比較は一概には言えない。しかしそれでも，おおまかな比較検討はある程度可能であろう。

まず何といっても最初にとりあげられるのは〝母親(マザー)〟の側面である。これについては3者とも同じ呼び名を与え，その内容もほぼ共通していると思われる。このことからも，女性性においてその母親的側面が，最も顕著で，とらえられやすいものであることが推測される。

他の側面については，3人それぞれ色々な命名がなされている。Neumann の分類は，大きく2つの基本的性格に分類する方法で，見方によれば，他の2人のあげた諸側面すべてを，この中に含むことも可能である。Neumann は，女性性を，男性との結びつきにのみ明確には限定してない。そのため上記のような包含的な見方も可能となる。しかし，Neumann 自身が著書の中で述べているように，実際には，男性あるいは子供とのかかわりあいの観点から，殆どの説明がなされている。そのため，Ulanov がのべた，アマゾンやメディウム的側面，また Guggenbühl が述べた，夫や愛や子供に関係のない女性的側面については，殆ど言及されていない。このため狭い意味でみれば，Neumann のマザー，アニマは，Ulanov のマザー，ヘタライと対応するとも言えるであろう。この場合，マザーはマザーに，アニマはヘタライに対応する。Guggenbühl の男性あるいは子供に関係している元型の数々も，これらに対応しているといえる。

一方，Guggenbühl の言う，夫や愛や子供に関係のない女性的側面は，Ulanov のアマゾン，メディウムと対応していると思われる。Ulanov はアマゾンのイメージとしてアルテミスをあげている所から，Guggenbühl のあげた，アマゾンの元型とアルテミスの元型は，いずれも Ulanov

のアマゾンに対応するかもしれない。また，Guggenbühl の尼僧，女司祭の元型はメディウムの中に含まれるようにも思われる。

さてこのように，ここに述べてきただけでも，多くの女性的側面が存在するが，Guggenbühl が言うように，個人の生涯のある特定の時期に，すべての側面が有力になるというわけではなく，また各々の時代は，その時代に優勢な男性的及び女性的元型をもっている。このため，その時代，その文化の中で優勢であった男性的及び女性的元型が，唯一妥当なものと解されることを彼は指摘している。

この時代，文化によって優勢な元型についてであるが，Ulanov は，西洋文化では純粋な女性アイデンティティは母性的本能に同一視することを基礎とすること，また現代の文化は，アマゾン，マザータイプに許容性が広いのに対し，ヘタライ，メディウムタイプは中世，ルネッサンス時代に文化的支持を受けていたと述べている。Guggenbühl もまた，これまで極めて優勢な女性の元型として，〝母〟の元型があり，ほとんどあらゆる時代に，これは活発に女によって生きられ，大抵の女性の行動を支配してきたと述べている。しかし彼は続けて，西ヨーロッパで注目すべきこととして，最近の10ないし15年間における母性的元型支配の衰退をあげている。そして母の元型とヘラの元型が今日衰えてきたので，他の元型が出現する余地が次第に増えてきたこと，このため，今日までわずかな種類の元型イメージしか演じられず，またその行動が元型を明確にすることができなかった女性たちが，新しい可能性の始まりに当って，より刺激され動かされつつあることを指摘している。山口(1985)は，女性性の中で，母性的側面（子供に対する母としての側面）と女性的側面(男性に対する女性としての側面）をとりあげ，日本の思春期・青年期の男女を対象に，それらがどのように受けとられているかを質問紙によって調査したが，その結果，日本においては，女性的側面より母性的側面の方が重視されていることが示唆された。日本においては，この結果や，また河合(1976)が言うように，西洋以上に母性原理が優勢と思われるが，それでも今日では，Guggenbühl の指摘同様，女性性の他の側面もまた出現しつつあるように思われる。

先に，Guggenbühl の〝個人の生涯のある特定の時期に，すべての側面が有力になるというわけではない〟という言葉を引用したが，これはもちろん，個人の中に一つの側面しか存在しないということを意味するのではないということを最後に述べておきたい Ulanov も述べるように，例えばある女性をマザータイプだと言う場合，それは彼女の一般的ないつもよく見られる方向性を言うのであって，彼女の全パーソナリティをさすのではなく，他の側面に対する能力がないという意味ではない。一人の人間の中には女性性のあらゆる側面の可能性が秘められているということは恐らく当然の事であろう。そしてこのような様々な側面を，自分の中にどのように統合，あるいは調和させていくかという事が，我々の一つの課題であると思われる。

注

1) ヘタライは，元来ギリシャの神殿に仕える女奴隷の一種で，のちの遊女の端をなすものであった。これらの遊女の中には，才色兼備の，見識と気骨とをもった名妓も少なくなかった。
2) Medium には巫女の意がある。

文　献

Freud, S.　高橋義孝訳　1969　愛情の心理学　日本教文社
Freud, S.　懸田克躬訳　1969　性欲論　日本教文社
Guggenbühl-Craig, A.　桶口和彦・武田憲道訳　1982　結婚の深層　創元社
河合隼雄　1976　母性社会日本の病理　中央公論社
呉　茂一　1979　ギリシア神話　新潮社
Neumann. E.　1955　*The Great Mother* Princeton, N. J.: Princeton University Press.（グレート・マザー　福島章他訳　1982　ナツメ社）
多田建治　1973　パーソナリティに於ける男女性の次元　心理学評論，16
Ulanov, A. B.　1971　*The Feminine in Jungian Psychology and in Christian Theology.* Evanston: Northwestern University Press.
Watts, A.　望月衛編　1966　女性の実力　誠信書房
山口素子　1985　男性性・女性性の2側面についての検討　心理学研究　56

（博士後期課程）